トピックス

第8回国際化粧品技術者連盟

ロンドン大会に出席して

松 村 輝 男

Report on the 8TH IFSCC

(LONDON CONFERENCE)

Teruo Matsumura

昭和49年8月26日より30日まで5日間に亘って、ロンドンにおいて国際化粧品技術者連盟(IFSCC)の第8回大会が開催され、日本からも総計58名の会議出席者があった。このうち、佐藤新一氏(ライオン歯磨)を団長とし、関根正巳氏(日光ケミカルズ)と安福正憲氏(サンスター歯磨)を副団長とする33名の旅行団に参加する機会を得たので、大会の模様を中心に、各地を視察した感想を述べて見たい。

今回で8回目を数えるIFSCCの大会は、2年おきに世界の各地で開催されることになっており、1972年ハンブルグ、1970年バルセロナ、1968年東京においてそれぞれ盛大に開かれてきた。

今回の会場は、英国化粧品技術者会の御尽力によって、ロンドン市内ハイドパーク公園に沿った一流ホテル Grosvenor House の Great Room と Ball Room とを借りきって行なわれ、また8月30日にはロンドン近郊に所在する研究所や工場を見学する1日のツアーが計画された。

出 発

私達一行は、8月25日21時30分羽田発ルフトハンザ機により、大勢の方々の見送りを受けてハンブルグ経由ロンドンへと飛び立ったのである。折しも強い低気圧が南方海上から接近しつつあり、出発直前には滝を流すような土砂降りとなり、あるいは出発延期となるかと心配されたが、私達を乗せたDC10型機はさすがにジャンボである、悠々と微動だにせず雨の中を飛立ったのは、私達一同胸をなで下したことであった。アンカレッジ経由で機は8月26日6時ハンブルグに到着、別の機に乗りかえて目的地ロンドンのヒースロー空港に着いたのはその日

の10時20分であった。ホテルに向う空港バスの窓外には雨に煙るロンドン近郊の家並が続いていた。私達一同は直接に会場である Grosvenor House Hotel 地下1階の登録場に赴き手続をとった。登録場には日本のためにとくに1つの窓口が提供されており、登録はきわめてスムーズに行なわれた。Grosvenor House Hotel から宿舎の London Hilton Hotel へと徒歩で向い、そこで約2時間仮眠をとってから再び Grosvenor House Hotel の Great Room で開かれた Opening Ceremony に出席する。ここで16時15分より17時30分まで英国化粧品技術者会の会頭 Miss Anne E. Young の歓迎のあいさつに引つづき、“化粧品の品質と安全性”について英国および米国の現状を述べた講演を含んだ Opening Ceremony が行われた。会が終り宿舎に引返すころには、透明な青空が頭上に広がっていた。19時には歓迎レセプション会場の Commonwealth Institute へ、ここでは広い会場のあちこちに世界各地の珍しい写真とか特産品とかが並べ

ライオン歯磨株式会社基礎研究所
神奈川県小田原市田島100
The Lion Dentrifrice Co. Ltd. Basic Research
Laboratories, 100 Tajima, Odawara, Kanagawa-
Ken.

られており、いかにも7つの海に雄飛した英国の首都ロンドンにふさわしい会場であった。立食パーティのあい間には、中央のホールで民俗舞踊と音楽がかなでられて、時のたつのを忘れやがて月明りの下を宿舎に2階バスでもどる頃には、ほのかな旅情を感じたことであった。

会場 グロブナーホテル

登 録

IFSCC の今回の大会における各国からの登録者の数は次の通りであった。

イギリス	331名	フランス	122名
ドイツ	120名	アメリカ	118名
スペイン	64名	日本	58名
イタリア	50名	スイス	49名
オランダ	37名	スウェーデン	25名
デンマーク	14名	ベルギー	9名
オーストラリア	6名	ユーゴスラビア	5名
チェコスロバキア	2名	ノルウェー	2名
イラク	2名	ギリシャ	2名
アルゼンチン	1名	韓国	1名
イラン	1名	ブルガリア	1名

以上を合計すると、全登録者数は1020名となる。そして、これらの全登録者数より家族の登録204名を差引くと816名となる。

なお、ハンブルグ大会では全登録者942名、家族の登録194名を差引いて748名であった。また、東京大会のときの登録者は581名であったから、回を追うごとに参加者が増加しているといえよう。

学 会

学会発表の会場になった Grosvenor House Hotel はロンドンの有名なハイドパーク公園に隣接した静かな環境にある格調高いホテルであり、また私達が宿泊した London Hilton Hotel からは、公園に沿った道を10分ほど歩けば行ける便利な所にあった。

会場には、英・独・仏・西の同時通訳が設置され、イヤホン借りて耳にあてるとこれらの国々の言葉で聞くことができる。日本からの発表は、石田（花王）、久保（資生堂）、奥村（花王）、林（花王）、梅野（資生堂）、宮沢（パピリオ）、林（高砂）、蓮沼（カネボウ）の諸氏からそれぞれ英語をもって発表され、会場出席者からの質疑に対しては、今回から林氏（高砂）の介添によって応答が行なわれることとなった。林氏の献身的な御助力には、私達一同心から感謝の意を表したい。

つぎに、発表の題名のあらましを紹介する。

8月27日（火）午前の部

“化粧品の有効性” I

座長：F. SERRA (1970/71 IFSCC全長)

- (1) 歯磨の汚染除去力
(英国 Beecham)
- (2) リン酸塩の歯垢除去力
(日本 花王)
- (3) いわゆる匂の除去剤について
(ドイツ Drom)
- (4) 日光照射に対するフィルターの研究
(チェコ Leciva Narodni Podnik)
- (5) 新しいサンスクリーン剤の安全性と効果の評価
(米国 Amerchol)
- (6) 日光に対する保護力の統計的評価
(ドイツ Beiersdorf AG).

8月27日（火）午後の部

“化粧品の有効性” II

座長：S. J. STRIANSE (1963/64 IFSCC会長)

- (1) 凍結天然物をベースとした化粧品
(イタリア ローマ大学)
- (2) ユニークな外観をもった新化粧品
(日本 資生堂)
- (3) 皮膚のインピーダンスと温度

第8回国際化粧品技術者連盟ロンドン大会に出席して

(フランス Uniliver)

- (4) β -Sitosterol-H³ の滲透に対する化粧品ベースの影響

(ブルガリア Experimental Base for Essential Oils, Perfumery & Cosmetic Research)

8月28日(水) グレートルーム会場 午前の部

“化粧品の安全性” I

座長: L. I. CONRAD, 1967/68 IFSCC 会長

- (1) 香料の安全性
(米国 Researh Institute for Fragrance Materials Inc.)
- (2) ベルガプテンの毒性
(英国 Albright & Wilson 社)
- (3) アルミニウムクロールヒドロールの皮膚科学, 組織学的吸入試験
(ドイツ Hoechst)
- (4) ウサギに対する Pyridinethione の作用
(英国 Beccham, Leicester Polytechnic)
- (5) 毛髪および皮膚に対する Zinc Pyrithione の吸着
(日本 花王)
- (6) 眼刺げきテストについて
(英国 Huntingdon Research)

8月28日(水) グレートルーム会場 午後の部

“化粧品の安全性” II

座長: Dr. S. GERSHON, 1972/73 IFSCC 会長

- (1) 活性剤の蛋白質に対する作用
(スペイン Antonio Puig S. A.)
- (2) アニオン活性剤の Percutaneous 吸着
(英国 Uniliver)
- (3) 石ケンおよび活性剤の皮膚刺げきを決定する因子
(英国 Uniliver)
- (4) 刺戟テストの促進について
(英国 Beecham)
- (5) トイレタリー製品より 2-hydroxy 2', 4, 4' di-chlorodiphenyl ether の Percutaneous 吸着
(英国 Uniliver)

8月28日(水) ボールルーム会場 午前の部

“分析法”

座長: Ir. P. H. WITZENS, 1966/67 IFSCC 会長

- (1) 化粧品中の有害物質の分析
(オランダ 政府食品管理部)
- (2) 口腔製品中のクロールヘキシジンの分析

(英国 Colgate)

- (3) 化粧品中の水溶性高分子の検出法
(日本 資生堂)
- (4) ガスおよび薄層クロマトグラフィーによる化粧品中の脂質の検出
(スペイン バルセロナ大学)
- (5) 皮膚脂質の検出に対する光学的方法の応用
(ドイツ ドルトムンド市立病院)
- (6) 歯磨中アラントインの分析
(英国 Colgate)

8月28日(水) ボールルーム会場 午後の部

“新研究技術”

座長: M. G. de NAVARRE, 1959/60 IFSCC 会長

- (1) 毛髪の損傷の走査型電子顕微鏡による観察
(英国 Uniliver)
- (2) 損傷した毛髪の研究
(日本 パビリオ)
- (3) プラセンタ抽出物の分析と効力
(フランス Hospital Debrousse)
- (4) O/W エマルジョンの生成における転相と活性剤の配置
(日本 高砂)
- (5) 化粧品の毒性とミセル ソリュビライゼーション
(フランス Nivea)

8月28日(木) 午前の部

“微生物の研究”

座長: Dr. J. HOLMBERG, 1973/74 IFSCC 前会長

- (1) バクテリアとシャンプー汚染
(英国 Uniliver)
 - (2) 微生物による化粧品用活性剤の資化性と抗菌剤の効果
(日本 カネボウ)
 - (3) 嫌気性微生物による活性剤の汚染
(スペイン Lamirsa Lab. Miret S. A.)
 - (4) 微生物の QC
(英国 Vick International)
- “化粧品と規制”
- 座長: A. E. DESPERROIS, 1965/66 IFSCC 会長

- (1) 善良な化粧品トイレタリー製造業者を保護する規制 (英国 DDD Co)
- (2) 拡大ヨーロッパと化粧品・トイレタリーの品質と

安全性

(英国 Uniliver)

“皮膚の研究”

座長：C. PUGH, 1974/75 IFSCC会長

- (1) Malpighian の細胞膜と必須脂肪酸
(フランス Uniliver)
- (2) 蛋白質熟成の ESR による研究
(フランス Uniliver)
- (3) ラット表皮から細胞内顆粒の分画操作
(フランス L'Oreal)

以上の通りであるが、それぞれの研究発表には討論の時間が充分にとられており、座長からもしばしば討論が発表に比べて劣らず重要であることが強調された。実際に、外国の研究者の質問の仕方が、私達日本人の質問のように短時間に簡潔に要点だけ質問するやり方ではなくて、まず自説をとうとうと述べてから、おもむろに質問に入るというやり方であって、その違いに深い印象を与えられた。

学会が終わってから、日本からの代表として諸江専務（高砂香料）も委員の一人として出席されているアワード選考委員会が開かれて、発表論文の審査が行なわれた。その結果、最優秀論文として、英国 Uniliver の Dr. Brown による「毛髪^毛の損傷の走査型電子顕微鏡による観察力」が選ばれたが、日本の林氏（高砂香料）の論文「O/W エマジョン^{エマ}の生成における転相と活性剤の配置」も、1位に劣らない支持を得たので、とくに今回は最優秀論文に続くものとして、林氏の論文およびフランス Uniliver よりの「皮膚のインピーダンスと湿度」の論文が表彰された。これらの選考結果の発表と表彰は、8月28日の夜10時より Grosvenor House Hotel の Great Room で開かれた Cougrss Banquet の席上において行なわれた。

学会の発表論文に関しては、日本よりの論文はいずれも諸外国の論文に比べて優るとも劣らない立派なものと思われたが、discussion を重視する学会の立場から見ると、林氏の献身的な御助力により大巾に改善されたとはいえ、言語面で不利にあることは誠に残念であった。

近い将来、いつの日にか日本の若い研究者の頭上にアワード表彰が輝く日のあることを心から願ってやまない。

8月30日（金）には、ロンドン郊外にある Beccham Products Co., Uniliver Research, Huntingdon Research など12ヶ所の工場や研究所の見学会が催され、会

員諸氏はそれぞれ希望の工場なり研究所なりを見学されて有益な日を過された。

参加者の一部

視 察

ロンドンの IFSCC 大会を無事終了した私達一同は、8月31日（土）アフリタリア航空機にてローマに向う。土・日曜日とローマの休日を楽しんだのち、香料のメッカといわれるフランスグランスの香料会社（Tombarel, Roure Du Pont, Mane Fils）の工場と研究所、スイスジュネーブ市内の Fil Menich 社の研究所を見学し、ジュネーブからヨーロッパ特急でフランスの田園風景を楽しみながらパリ入り。パリ近郊約 100km ジャンヌダルクで有名なオルレアンにある Christian Dior の清らかな化粧品工場を見学し、9月9日には Bingen から有名なローレライの岩を仰ぎ見る St. Goarshausen まで船でライン河を下り、ケルンへ。翌9月10日には、ケルン市に隣接する Leverkusen の巨大なバイエル社の工場を見学した。

これらの視察旅行において感じたところの一端をつぎに書き記してみたい。

まず、ヨーロッパの会社全体についていえることは、50年～100年先を見透しての長期計画のもとに会社経営が行なわれていることを痛感した。

私達の見学した工場のなかで、バイエル社の Leverkusen の工場はまさにその典型であって、今から60年前の1910年に100万坪におよぶ現在の土地を購入し、建物の配列も製造工程の流れを考慮して実に計画的に建設されている。パリ市の南方100kmのオルレアンの田園のなかに、林に囲まれて静かに建っている Christian Dior の新しい工場も、綿密な計画のもとに着々と拡充がなされていた。

たまたま、プレジデント誌10月号にヤナセ社長梁瀬次

第8回国際化粧品技術者連盟ロンドン大会に出席して

郎氏の対談が掲載されているのを読んだところ、「ダイムラー・ベンツ社の重役は30年先のベンツ社がどうあるべきかを考えている」という文章が目に入ったが、まさにさもありなんと感じた次第である。

つぎに、工場の省力化にも勿論力を入れているが、この点では日本の現状とそう変わらないように感ぜられた。むしろそれ以上に、研究とか事務の合理化の面で、コンピュータの活用を含めて実によくシステム化の工夫がなされており、省力化に貢献していると共に、いろいろのデータが会社の財産として有効に利用される形になっているのが見られた。

ロンドンでの学会も含めて此度の旅行を通じてもっとも強く感じた点を最後に記すと、ヨーロッパ各国の化粧品技術者が実に真剣に自分たちの問題にとりくんでいるその真面目さであって、ヨーロッパの底力をまざまざと眼で感ずるとともに、戦後急速な経済発展を行ない設備

や機械や規模の面で諸外国に決して遜色のない水準にまで進んできた私達日本人は、さらにこのような心の問題において今一度反省してみる必要がないだろうか、またそうすることによって一段の進歩がもたらされるのではなかろうか。

9月13日の金曜日夕方16時20分に、私達一同は往きと同じルフトハンザDC10型機で元気に羽田に帰着した。

1人の事故も病気もなく、和気あいあいと楽しい旅行を続けることができたのは、各地で私達一同を歓迎して下さった関係会社の各位の御厚意と、各社へのアポイントなど旅行に先立つ準備に、また旅行中は私達団員に精神的や肉体的や経済的などあらゆる面で豊かな経験を伝えて下さった団長、副団長の皆様の御尽力、そしてまた交通公社の皆様の御努力によるものであって、誌面をかりて心より感謝の意を表して筆をおく。

(昭和49年11月15日受理)